

震災特集

阪神大震災(95年)の被災地から集まった義援金などを基に、ネパール南西部のプトワル市に建設された「AMD A(アムダ)ネパール子ども病院」が来月2日、開設10周年を迎える。これまでに延べ約40万人の母子が来院し、約1万9000人の赤ちゃんが産声を上げた。K O B Eとネパールのきずなが生んだ病院は、母子の未来をばぐくんでいる。

【藤原素志】

AMD Aネパール子ども病院

ネパールは妊婦検診が普及しておらず、出産で命を落とす女性が多い。帝王切開が大半で、妊婦死亡率は日本の60倍、乳幼児死亡率も25倍。自宅での出産は、感染症にかかるリスクも高い。現地に5度赴任した神戸市看護大の早瀬麻子助教は「看護師らに検診の重要性を説き、自然分娩や自由な体位での出産を指導した」と語る。

病院は阪神大震災でネパールなどから支援を受けたお返しにと国際医療NGO「AMD A(本部 南山市)と毎日新聞などがキャンペーンを展開し、被災者らからの浄財で設立した。AMD Aネパール支部が運営している。「医療は平等」をモットーに、カースト制度の身分に関係なく患者を受け入れ、診療費は他の病院の約10分の1、入院や手術費も半額以下。貧しい人は医療費をローン払いにして、父親に病院の工事に携わってもらうなど工夫を凝らす。看護師らは村を巡回し、育児法なども伝授する。この10年で運営、経営とも自立し、国際支援のモデルケースとなった。AMD A本部の菅波茂理理事長は「病院は日本とネパールの懸け橋」と話す。

来年には周産期病棟を増設する計画で、AMD A本部(086・284・7730)は

命はぐくみ10年



子ども病院で無事に出産を終えたネパール人の親子
—AMD A兵庫県支部提供

定点ルポ 総持寺通り商店街



「地震では放送設備も倒れ、被害が出ました」と話す池田課長
—石川県輪島市門前町8日

被災地ではもう、ひんやりした秋風がコスモスやススキを揺らしている。今回は少し寂しい報告だ。石川県輪島市門前町の総持寺通り商店街近くのスタジオから36年間、生活情報を提供し続けた市運営の有線放送電話室が9月末、閉鎖した。能登半島地震(07年3月25日)では住民の安否確認に活躍しただけに、商店街の人たちも残念そうだ。

合併前の旧門前町が72年に開設。固定電話の普及率が2割程度だったころ。各戸にピーカー付き電話機を支給し、1日3回、行事案内や診察の時間などを伝えた。地震でもほとんど断線せず市は救済物資の情報や高波への警戒などを放送し続けた。担当した川原とも子さん(37)は「情報は素早く流し、原稿はゆっくり読むことを心がけた」と振り返る。だが、設備は老朽化し、電話機が故の障りも代わりの部品はなく

役割終えた市の有線放送

284・7730)は区雲井通5の神戸市勤労会館4階で開かれる。

病院の設立、運営にかかわった、AMD A兵庫県支部長の江口貴博医師▽AMD A本部の菅波理理事長▽AMD A社会開発機構の鈴木俊介理事長▽元毎日新聞大阪本社編集局長の藤原健さん—が、子ども病院の現状などについて話す。参加費無料。問い合わせはAMD A本部(086・284・7730)。

K O B Eの支援 根付く教訓

子ども病院創設直後から計6回、通算約半年間にわたって現地に赴任したAMD A兵庫県支部の医師、小倉健一郎さん(神戸市)に聞いた。

病院には「阪神大震災で被災地の困っている人を助けるのは当たり前」という教訓が根づいています。貧困層の子どもを救おうと、日本人医師の指導を受けたネパール医師が懸命に診療しています。K O B Eの支援があったからこそ、活動を続けることができたのです。

病院開設から約5年間は日本からの資金が必要でしたが、今では診療費などで運営費をまかなうことができるようになりました。

しかし課題も多い。ネパール全土から大勢の母子が訪れ、一つのベッドに2〜3人が寝たり、廊下にもベッドを並べるなど、手狭になっています。手術中に停電することもあり、医療設備も不足しています。アジア最貧国のネパールでは、救えるはずの命が失われている。更なる支援が必要です。

亡くなった子どもたちの姿は、今も私の心に焼き付いています。ネパールに向かい続ける原動力です。

おべら・けんいちろう 農業短大卒業後、青年海外協力隊でフィリピンへ。帰国後、佐賀医科大学に進学。95年からAMD A兵庫で活動。四大地震では政府の「国際緊急援助隊医療チーム」副団長も務めた。

能登半島地震 被災地情報

●義援金
【石川県(厚生政策課076・225・1414)】北国銀行県庁支店—普通199926「能登半島地震災害義援金」
▽郵便局—00730の4の7700「石川県災害対策本部」
【輪島市(0768・22・2211)】北国銀行輪島支店—普通469987▽郵便局—00770の8の7720。名義はいずれも「能登半島地震輪島市義援金」

紙芝居で「次世代に伝えたい」



紙芝居を手にする(左から)森青木さん、関本優菜さん、東絵里佳さん
—兵庫県明石市二見町の県立明石西高校で8日

兵庫県立明石西高校(十名立)校長、生徒数1050人のボランティア同好会は、04年10月の台風23号被害の際、生徒が被災地で泥の搬出作業などのボランティア活動に携わったことを契機に設立された。現在も「命のつながり」をテーマに活動に取り組んでいる。

今年には会員の女子生徒3人が、同県豊岡市でコウノトリの餌場の水田づくりを進める「コウノトリ育む農法」を実践する農家を6回訪ね、田植えから収穫までを体験した。都会育ちの生徒にとって、水田は「生命のつながり」を学ぶ貴重な機会。

兵庫・明石西高

虫取り網を手にかエルやクモを数え、フナやドジョウが死ぬことで稲の栄養になる現実を知った。一方、阪神大震災の被災地・淡路島も訪れ、復興住宅のお年寄りからは、被災直後に助け合ったことを懐かしむ声を聞いた。

二つの被災地から、生徒は「命のつながり」の大切さを学び、「私たちの言葉で次世代に伝えたい」と紙芝居作りを企画した。絵の具で14枚の作品に仕上げ、最後の1枚には、豊岡市で出会った農家の手に手形を押しつけてもらい、中央にコウノトリを描く予定だ。部員の森青木さん(17)は「一つの命には多くの命がかかわっていると実感した。場面一つ一つに思いを込めて子どもたちに伝えたい」と意気込む。

11月に豊岡市で初披露する。受け入れてくれる小学校も募集している。顧問の井上勇教諭(54)は「紙芝居を通じて、震災を知らない子どもたちに、命のつながりや尊厳を伝えられれば」と話す。同高(078・943・3550)。

【吉川雄策、写真も】

飛出せ！防災教育